

令和6年度第3回天理市総合教育会議会議録

1. 開会年月日 令和6年9月19日(木)
2. 閉会年月日 令和6年9月19日(木)
3. 出席委員氏名
並河 健 伊勢 和彦 吉田 吉和
西田 伊作 西畑 敦司 末浪 真希
4. 委員及び傍聴人を除くほか議場に出席した者の氏名
事務局長 奥村 紀一
教育次長 山口 忠幸
教育総務課長 前山 紘昭
まなび推進課長 藪内 善史
5. 会議に付した案件
1 次期教育大綱について
6. 会議の経過議題
開会 午後3時30分
終了 午後4時43分

開会 午後3時30分

1. 教育総務課長

それでは、始めさせていただきたいと思います。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。予定時刻がまいりましたので、第3回天理市総合教育会議を開催させていただきます。

1. 市長

本題に入りたいと思いますが、前回、子どもたちに、どんな力をつけていきたいのかというところを、まずしっかりみんなで共有できないとダメだというお話をさせていただきました。

ちょっと事務局の方がまとめてくれているものの、私が先般ですね、校長と生徒指導の先生方に一同に集まっただいて、はっきり言ってこれからいくと、いつまでたってもかみ合わないという話をさせていただきました。

学校三部制だったりとか、あるいはイチカステーションだったりとか、地域とのいろんな協働って言っても、それによってどんな力を養うことに寄与するんだみたいなベースの議論ができてないまま、何気なく良さそうな気がするっていう人と、何気なくめんどくさそうっていう風に思う人たちがいるっていうことで、そのそれぞれの施策を議論しても始まらないから。とにかく子どもの姿っていうところについて話をしてくださいということで、順番に話をしてもらったのが、これがとりあえず、まとめてくれたやつなんですかね。

そんなに、前回、委員の皆さんに言っていたことからずれた話ではなかった。やっぱりその多様性だったりとか、その主体性みたいなところであったり、そういう人が多かったなというのは思います。

中にはそのアート志向みたいな形で、言ってくれた先生は、ピカソとゴッホとどっちがいいかなんていうのは、それぞれの感じ方、考え方だけど、じゃあ自分としてはどこがいいと思うとか、そういうようなことを答えが決まっている部分じゃなくて、しっかり話せるような機会っていうのが大事だよなということを随分言っていたので。まずちょっと、前回この場で出た話の議事録は共有してるんですか。この教育委員さんに、総合教育会議の議論自体をとりあえず読んでもらって、こないだの話をした前提なんですね、今回は。

教育委員会の皆さんからいただいたご意見で、今日はもし付け加えたいという点があれば承りますし、ただ今日はですね、お話させていただきたいのは、ちょっと次のステップで良いクラスって何なんだっていう話を昨日ほっ

とステーションのメンバーとさせていただいた。

つまり、その多様性、主体性が大事だ、それぞれを大事にしないといけな
いって言うふうに、ほぼ一同に言うんですよ。だけど、本当にそれがその普
段のその学校だったり、運営の中でどんだけ活かされてるんですかっていう
のが、おっしゃる割にちょっと疑問としない。

それとですね、ちょっと共有したい事例が二つありまして、一つはそのう
ちの校長先生の一人から、はっきり言ってくれたのは良かったと思います。
多様性、それぞれの学びだったりをしっかりとやっていくっていうのは、もち
ろん大事なんだけれど、個の尊重は大事なんだけれども、中には学校を挙げ
て、やっぱり目標を掲げて、一つのことにみんなで打ち込んでいく中でっ
ていうような、その集団としての取り組みも大事だって自分は思うんですっ
ていう話が出ました。その中で例に挙げられたのは、うちの学校は漢字検定な
んだっていう話をされました。例として。学校を挙げて漢字検定に取り組ん
で、みんなでこれ頑張ろうみたいなことが、多分その学び全体に向き合っ
ていくようなことのきっかけ、土台として使ってるんだっていう話をされてい
て。それ自体絶対それがとんでもなくダメだということではないんですけ
ど、一個だけ質問させていただいたのが、ただ、その識字が苦手だったり、
あるいはそこまで極端でなくても、やっぱり漢字自体は苦手で、でも他のこ
とは得意みたいな子もいるわけですね。だからうちはまず漢字検定だっ
て言って、一つの尺度を当てはめていった時に、それについては苦手な子
に対してどういうケアをするのっていう質問をさせてもらったら、サポ
ート体制付けてますって言われました。

だからその漢字が苦手な子とかがいたら、それにはサポートするんで。だ
からあくまで条規は一個ビシッとしたのがある中で、ついていきづらい子
がいたら、その子がちょっとでもついていけるように下駄を履かせたり、寄
り添いはするんだけどっていうことで、あんまり価値観自体を多様にしよう
という発想よりは、集団としての盛り上がりみたいなのは大事にしてる感
じがありました。

それと、これは幼稚園の方で昨日あった事例なんですけど、ちょっとしん
どいご家庭だそうです。毎日決まった時間に来られない。

それでですね、ほんとステーションのメンバーが巡回して行ってる時に、
その話をお母さんとかに聞くと、ご家庭の調子がいい時は来れる時もあるん
ですって。頑張ってくれる時もあるんです。でも、調子悪い時はちょっとダ
メでっていう話。

決まった時間に来るっていうことが目的化しちゃってる。特に家庭がしん
どかったら、無理にその決まった時間に来たってプレッシャーをかけること

が、むしろその幼稚園に行きづらくなったりとか、そういう可能性もあるわけで。まずは、そのご家庭、園児に何時に来るとかっていうよりも、安心してちょっとでも落ち着きながら、無理なく来れる流れをつけていくことが大事なんじゃないかって言ったら、ちょっとハッとしたような顔はしたらしいんですけど。

ところで、なんでそんなにこの決まった時間に来ることに今こだわってるのかなっていうと、まさに運動会のシーズン。運動会のシーズンなんで、遅れてきたらちゃんとその練習にみんなと一緒に参加できなくなっちゃうと。

そういう形で集団がしっかり取り組んで、ここに遅れるのはいけないからってというのが、その運動会のあり方自体がどうなの。何のためにやってんのっていう多分根っこの部分まできちんと話をしていかないと、みんな子どもにつけたい力は何ですかって言ったら、いや多様性とかいっぱい言うんだけど、言ってることとやってることが違わないかっていうのが、私の違和感です。

それで、私ばかり喋ってもいけないんで、その時についつい極端な例で見せてしまったのがこの写真で、分かりやすいように文字をちょっと入れてみたんですけど。言わずと知れた「学徒出陣」1943年。集団の証として。雨が降ってもビシッと行進したわけですよ。

スーパーバイザーの一人がちょっとこんな話をしてくれまして、お子さんがちっちゃい時に、みんなが並んでいる時に飛び出して走ってきてくれたんですって。飛び出して走ってくるから、先生慌てて捕まえますやん。ガッと引き戻されたらしいんですけど。もともと特性があるお子さんで、ちなみになんで走ってきたのっていう話を聞いたら、お弁当美味しかったってことを伝えたかったらしいんですよ。それまでのいろんなものにメッセージを書いたりとかして、それでコミュニケーション取るみたいなのを大事にしておられたんですけど、要はなんで走っていったかみたいなことは、多分確認してもらえなかったと思います。飛び出していて引き戻さないといけないということが優先されてしまったっていう。

でも、これ今と変わってますかね。この大人たちのこの目線とか期待っていうのがすごくあるわけですよ。

これ、答辞を読んだ実際の方です。書き直させられたそうです。

最初は頑張ってるって行きますぐらいのレベルだったのが、その指導官にご指摘をされる中で、だんだんエキセントリックになって、こっちに答えられる言葉は「生還を期せず」という言葉が入った。この人自身は生還しちゃった。

ちなみに、九十代まで生きておられるんですけど、「お前生還を期せずって

言ってたよな」みたいなの。周りの友達が亡くなっているのをどう思うねんみたいなの。非常につらい人生を歩まれたそうです。

これを見守る人たちもいるわけですね。これ女性ですけど、保護者だったりとか、いろんな人のパターンがあるでしょう。こうやって見守ってますけど、やっぱり内心は様々。これちなみにあの答辞を読んだ方の奥様は、結婚されて非常に長命でいらっしゃる。だから、この人は死んできてとは思っていないわけですよ。だけど、このご主人はこういう状態ですから、頑張ってるんで、「よく言った」みたいになって、それぞれに思いがあるっていうことについて、でもやっぱり万歳って全体でやってる中ではもう埋もれちゃうわけですよ。

今と本当に変わってますかねっていう。これは最も極端な例をお示ししてるかもしれませんが、こういう思考を大事にしてしまい、それが集団に合わせてしっかり行動できるってことが、やっぱりすごく大事なんだっていう思考がこうやってみんなの中で更新して、万歳みたいところで学べることもあるよねっていうことを、やっぱりどこかで強調しちゃってる心理がないですか。

私は、これは全部無くせとは言わないけど、それとその多様性を尊重するとか、個々の状況に合わせてだったり、生きづらさをなくして居場所を作っていくみたいなの部分とのバランスって言うのかな。その辺ってどういうところなのみたいなのを議論できないまま抑え込む方が、今この周りで見守ってやって絶対的権力があつた方なんで、これ飛び出して行って、何かちゃんとやってないやつがいたら殴り倒しても許されたわけですよ。

許されなくなると。そこまでのパワーはないという中で、抑え込む方もしんどくなっちゃってるのが今の状況じゃないですかねっていう。だけど、やっぱりちゃんと時間通りに来て、しんどいご家庭なのは分かってるはずなんです。

分かってんだけど、ちゃんと来て、その時間から運動会の練習に参加してもらうことがとっても大事なことだというふうに現場は思ってます。それぞれのことを何のためにやってるんですかみたいなのを、ちょっと今回、SDGsでこの取り組みは、SDGsの何番と何番と何番に寄与するみたいなのがよくあるじゃないですか。

私、今回やりたいなと思ってるのは、目指すこういう子どもの姿だつて、その目指す姿っていうのがこの人じゃ困るんですけどね。こちら側じゃなくて、本当のこの人の内心の方に新婚ほやほやなんです。こっちの人がハッピーになる視線で、そのどう大事にするかってことをちゃんと整理をした上で、今、例えば学校だったり、その共有意識を上げてやろうと思ってること

が、じゃあこれってどの力に本当につながりますかっていう。そのまさにSDGs でやってるような感覚のものにしていって、本当にこういうところに役に立ってるよねと。

子どもまん中の視点から子どもの役に立ってるよねっていう部分が、本当にちゃんと議論できないまま、もう昔からずっとやってますんでっていう話が多すぎるわけですね。幼稚園に至っては、お作法のかたまりで、もう誕生会の時は飾り付けは、ああで、こうで、参観の時にはしっかり見せて。

でも、参観で親を喜ばせることが目的になっちゃってませんか。その親から見てどう見えるかっていう運動会の方向に近づいていってしまって。でも、そっち向いてやる思考からちょっと脱却しませんかというの、すみません長かったです、私の問いかけです。

その上で、いいクラスとはどういうクラスなんでしょう。それをちょっとぜひ皆さんに意見を聞かせていただいて。要は良いクラスの派生形が、そのままの延長がいい学校だったりとか、いい園ということじゃないですか。

さて、教育長、どういうのが良いクラスですか。このクラスはまとまりがいいとか、みんな頑張れるとか言うじゃないですか。一生懸命になれるって一つになれるんです。うちは一つになってるけども、どういうのが良いクラスなんでしょうか。

1. 教育長

どういうふうなのがいいクラスか。

失敗ができる。それをあざ笑ったり、揶揄されたりしないと。

1. 市長

前提にだからチャレンジできるってことですか。

1. 教育長

はい。失敗したことがむしろ、励ましというか、前を向く力になれる。

1. 市長

個別に。班とか。クラス全体で。これは、どういう状況が今イメージされたんでしょうか。例えばどんな画が、その失敗して、みんなが失敗できるっていう、もうちょっとビジュアルが頭に浮かんでくるようなものは。過去こういう子がいたでもいいです。

じゃ、考えてもらってる間に、すいません。どうですか、いいクラスっていうのはどういうものですか。

1. 西畑委員

それぞれの違う個性がね、上手いこと組み合わせさってるような、多様性っていう話でいっていろいろ出てきますけど、それぞれ違うこと勝手にやってくるんじゃないかと。

それぞれができる、これが得意、不得意っていうのもあるでしょうけど、それがうまいこと組み合わせさって、何か次の面白いことができているとか、もっと良いことができているとか、そういうふうなのが自然と組み合わせさっているような状態が作り上げられている。

そういう関係性があるようなクラスっていうのがいいクラスだと思いますね。

1. 市長

さっきのあの漢字検定、みんなで取り組むっていうのはどうですか？

1. 西畑委員

別にね、漢字検定でなくても、あの算数検定でも何でもいいと思うんですよ。

1. 市長

いや私もそれはあくまで漢字検定は、例なんですけど、何か一個のこの目標みたいな、学校全体だってクラス全体で掲げて、とりあえずそれをみんなでチャレンジしまくるんだみたいな形のっていうのと、今のでもそれについて得意な子も不得意な子もいるよねっていう部分は、どうバランスを取っていけばいい。

1. 西畑委員

何かにチャレンジしましょうでいいと思うんですよ。漢字が得意な子が漢字やったらいいし、算数が得意な子が算数やったらいいし、走るのが速い子は走るのが速いものやったらいいし。何か公的な検定を受けさせようというなら、それはそれでいい。

でもそれがいくつもあって、あんたはどれやるっていう自分がチャレンジできるっていうようなものがあった。

1. 市長

場合によっては設定の部分から一緒に。

1. 西畑委員

そうですね。

1. 市長

なるほどですね。

はい、どうですか。

1. 末浪委員

いいクラスっていう集団の作り上げっていうところで言うと、やっぱり多様性を認め合うとか主体性とかっていうところの言葉だけが歩いてて、実際に具体的っていうのであれば、先ほど言った、個と個がコラボレーションできる環境をクラス運営として、教師がそれを、仕掛けを作らなアカンっていうところだとは思いますが。

1. 市長

完全に自然体で好きにやれじゃないですよ。

1. 末浪委員

そうです。

1. 市長

何らかのきっかけをどううまく作っていくかっていうことなんですよ。

1. 末浪委員

じゃあ、それがあの校長先生は漢字検定だったっていうところですけども、そうすると何かそこは履き違えてる感じがして、矛盾が生まれる。

言葉は多様性で認めようとか言ってるんですけど、押し付けてる感じがするんで、やってることと矛盾、違和感っていうのは、市長が感じられたそれなのかなっていう風に思ってます。そうするとやっぱり言ったように、何かに取り組むっていうのが漢字テストじゃなくて、言ってるイメージですよ。

1. 市長

自分で設定できる。

1. 末浪委員

このテストがこれみたいなのか、それは教師がいくつかバージョンを考えて設定する。

自分は、じゃあこの科目、これに対しての頑張るみたいところで、みんながフルで参加できるっていうような仕組み作りができている経営者がいるのがいいクラスなのかなって思います。

1. 市長

ちなみに漢字検定以外で、うちの下の子が福住小学校に行っていた時は英検だったらしい。

やたらみんな英検を受ける。毎回落ちる子がいまして。ちょっとのところで。

1. 末浪委員

逆に嫌になってしまう。だからそれは教師が設定するにしても、やっぱりある程度の実習っていうところを見ないといけないかなと思いますし。

1. 市長

でもどうなんですか。あれはやっぱり設定したくなるものですか。

1. まなび推進課長

ある一定の目標を達成させるためっていう部分では、そういう設定をさせてしまいたくなるころはあるんですけども。

1. 市長

今おっしゃった、それぞれがそのチャレンジするものをしっかり設定しながら、教育長のその中で失敗も許されるということとつながっているとは思いますが、どうですか。

1. まなび推進課長

失敗してこそ、次のどう自分が切り替えてプラスに変えていくかっていう、そういう力や意識づけが大事かなとは思いますが。

それがみんな認め合えるクラスこそ、やっぱりいいクラスなのかなと感じます。

1. 市長

他、同じ感じでも違うイメージでも結構なんですけど、どうですか。いい

クラスって。

1. 西田委員

ちょっと抽象的になるかもしれないんですけど、子どもは未熟なので、やっぱり単純に居心地が良かったり、単純にそのクラスが好きであったり。

でも、そう感じられるのは、今教育長がおっしゃったように、何かトラブルにあった時にも何か前向きに考えられるようなクラスの雰囲気があったり、そういうのを親も学校の先生も、いわゆるその子どもまん中という目線で、意識を持って関わる方こそ、子どもたちもそういう空気の中で、その居心地の良さを感じられるのかなというような事を思うんですけど。

1. 市長

昨日、心理士の中尾さんとお話をしていた時に、彼のイメージは、毎日帰ってきた時に、今日こんなんが楽しかったみたいな感じで、いい表情をしてくれるようなところであれば、スペシャルなことが別に設定されていて、大きな大会とかじゃなくてもっていう話をしてくれまして。

それは私もそういう機会よりも日々ハッピーっていう方に、もうちょっとシフトできないかなという思いがあるんですけどね。だから今までその年間の中で計画があって、節目節目があって、そこに向けて何か取り組んでいく中で集団性を作っていくってという思考だったと思うんですけど。

そこから今おっしゃっていただいたような部分。

1. 西田委員

特別な大きな波がなくても、何かそういう日常の中で、大きな変化がなくても、毎日学校に、自然に通うことができるような空気感というのでしょうか。そういうのが一番根本として大事なのかなと思いますけどね。

1. 市長

あんまり言うと、ちょっとまたあれかもしれないですけど。運動会シリーズで、とある園の先生が曲選びを管理職に何回も突き返されて泣いたっていうケース。それでしんどそうな顔しちゃって。

日々の例えば 保育に取り組んでたら、本当にそれ何のためにやんのっていう。だから、その決まった定型的なことをこなして、それを超えることに、今のは極端なパターンかもしれないですけど、先生自身がそれで余裕がなくなって、日々の子どもが前向きに、だから特別な波がないんだけど、今日楽しかったみたいな、クラス作りにならないかなっていうのが。

1. 西田委員

本当にそう思います。これ、コロナの時に大きな活動ができなくなって。その時にやっぱり皆さん今までの行事や活動が何のためにあったのかとかいうことをやっぱり考えたと思うんですね。その時に立ち止まって。でもやっぱり開けていくとまた元に戻ろうとする。

その時にやっぱり運動会でも何でも、いや形じゃないと。何のためにやっていたか。だから、大事な部分は残して、できることをやったらいいじゃないかみたいな空気になったのに、それをもっと大事にして、その形ありきでまた動き出している感じがすごくあるんですね。

1. 市長

形もあるだろうし、あとやっぱり先生の中で、やっぱこういう機会大事っていう。やっぱりでもそれはあるから戻しちゃうんじゃないですかね。どうですか。どう次長。

1. 教育次長

私は特に体育主任とかしてた過去があるので、やはりそういうようなところはありましたね。

1. 市長

今やって会話する中でどう思います。やっぱりでも、その中でも輝いてた子もいると思うんですけど、輝けてた子もいるけど、しんどかった子もいるであろうっていう。

1. 教育次長

ちょっと極端な例なんで何とも言えないですけども。

1. 市長

あえてだから僕は最も極端な例を出している。だけど、皆さんの思考回路って本当にここから抜け出ているのかなというために、あえてすみません、挑発してるわけじゃないけれども。

1. 西田委員

でもここで育ってますんでね、我々も。

1. 末浪委員

大事っていうよりかは安心っていうところにいるんちゃうかな。

1. 市長

それに、それをやっていることで安心しちゃってた。みんなそういう風にやってるから。だからすごく難しい。今言っていることは。それをどうやって自分が実践しろという風になった時に、それぞれ目標設定させてチャレンジさせてやれって言うんですかって。もっと何かハードルが高いことを強いられるみたいに、ひょっとしたらその教育現場の方が感じられるかもしれないけれども。

ただ、西田委員がおっしゃっていたのは、すごく私重要なポイントだと思っていて、特別な何かでそれをついていうのではなくて、日々の暮らしの学校生活だったり、中で些細なことでもいいんですよ。すげえみたいなことをそれぞれ全員ができるはずがないし、いかがですか。

1. 吉田委員

漢字検定はね、成果が出るとそれはいいものですよ。だけど、教師にとってはそれはいいことかもしれないけども、子どもにとってそれが良いクラスかっていうと、自分が足引っ張ってるんだろうなと思ってる子は大変だと思うんですよ。

1. 市長

そういう子にはだからサポート要員をつければ良いという思考なんですよ。だからサポートする人員をくれとの話なんですよ。

1. 吉田委員

そうじゃなくてね。これはね、福住の英語検定でもね、あれ全員に受けさせるからダメなんですよ。

受けたい子をは受けようって言って用意してあげる。そうすれば、得意な子は頑張ってるやっっていく。その他の子は別なことで頑張ろうと思うんでね。

1. 市長

なんでそういう会話が普通に職員室できないですか。なんか社会に圧を感じるんです。

幼稚園の話なんですけどね。続きがあって、幼稚園は特に地域との関わりが強いから難しいところがあるんですって言ったんですよ。うちの家庭局の

面々も。地域がこれやれって言うてくるの。

幼稚園でね、幼稚園の運動会だったりなんだったり。それ何の意味があんのって私が投げたりした時に、先生方がね、ある現場だったり携わってる中が、周りにそういう期待感があるみたいに思ってしまった。だから福住の校区の中で、うちから今年、二級皆通すぜみたいな圧をかけてる人って私知らないんですけど。

1. 吉田委員

地域住民ではないと思います。学校が、福住はこれで行くっていうのをいくつか挙げてますよね。

前の前の校長先生の時には、やはり英語学習に力を入れておられました。

力入れるためには、その成果を出すために、それを示せるものということで全員に受けさせたんだと思うんだけど。全員に受けさせるっていうのが良くなかった。

1. 市長

その示せるものっていうのは、ちょっと一つのキーワードになってると思うんですけど、外形的に共有できるものにこだわっちゃってるということなんですかね。

1. 吉田委員

そう思いますね。

例えばちょっと例は違いますけども、私が尊敬する立派な陸上の指導者の方がね。やっぱり強豪チームを作ればいい記録を出す選手がいくつも出てくるとというのが目標なわけけども、その人がやっぱり一番大事にしてるのは、一人一人の個人記録がね、自己ベストがどれだけ上がるかと。

また、そのメンバーが、あまりパツとしない子であっても、自己記録が上がることにみんなが喜んであげるような、そういう活動をする人がいましたけれども。一人一人が、個人内評価ですね。それが上がっていくことが大事。だから、あの陸上の監督としてみれば、当然、県一位を育てる方がいいわけでしょう。外からの評価はいいんでしょうけども。だけど、その何十人の部員を指導していく、指導者としては、やっぱり一人一人を伸ばす。そういうものを選んでいかないとダメかなと思いますね。

1. 市長

一学期にほっとステーションに寄せられたご意見で、監督がレギュラー陣

だけ、えこひいきして、そっちは送り迎え全部やってあげるんだけど、あとは自分で来いみたいな運営の仕方はどうなんでしょうっていう、超真逆な物が来ちゃったんですけど。

いや、だからその自己ベストで、しかも別にそのクラブも体育の授業のように強制参加じゃなくて、やりたい子なわけですよ。

ちゃんとそれぞれにいろんなやりたい、その他にも種目がある中で、それぞれの自己ベストを大事にできるといういい言葉をいただきました。

1. 教育長

いいですね今の。人のことを喜べる。

1. 市長

それここからまたフィードバックしていくやつだから、「人のことを喜べる」きました。

1. 教育長

自分のことだけじゃなくて、人のことを喜ぶ。人の頑張りや成長を喜べる。そういう集団。

1. 市長

先ほどの答辞を読んだ方は、散々いじめられはったの。九十歳になるまで、このことは触れたがらなかったと。

1. 教育長

すごくわかることだな。あの私ね、あの小学校五年生の時に半年クラスの誰にも口を聞いてもらえなかったんですよ。誰にもですよ、半年間。それは何かって言ったら、もう学級にあの序列が強いやつとか、グループ組んで決まってる、その強いやんちゃな奴らをなんとか学級に入れようと思うんで、先生らはお上手みたいにしておだてて学級経営をしてたと。

ところが家庭科の先生が産休でお休みされて、新しい家庭科の経験の浅い先生が来て、その子らがふざけてるのを厳しく怒らはったと。そいつらの7、8人ぐらいの団体は、もうあの先生の言うこと聞くな、一切聞くなってクラスに命令して、みんながそれに従っちゃった。

うちのクラスは家庭科室の掃除が担当やったけど、誰も掃除しない、すんなよって言われてるから。私はそれ聞くの嫌やから一人で家庭科室の掃除してたんです。それを見た先生が、伊勢くんありがとうって私を褒めたんで

す。「褒めやんといて、俺の立場わかってないやろ。」と思いながら。

もうそこから、私は半年、一日中誰とも口を聞いてもらえない。もう私、給食食べたらもう毎日のように学級抜けましたね。やっぱり。だって朝行つた時に誰も口聞いてくれないし。

1. 市長

いろんな要素があったと思うんですけど。

1. 教育長

その時にね、先生見てんのかって、先生誰見てんのって。あのある中学校の先生が、うちの子どもたちはすごくまとまっていい子ですって言うけど、あの時ほんとステーションですごい揉めてる案件があったじゃないですか。

1. 市長

何を見てるのかなと思いましたけど。

1. 教育長

先生自分の授業を一生懸命やることを見てるだけで、どの子どもを見てんの。

1. 市長

だからわかんないのよ、この状況だと。「死にたくない僕」とかっていう子もいっぱい居ても。だからこの中で一人徴兵拒否して捕まる人みたいなもんですね。

1. 教育長

それを三年生の時も、もうそういうふうな立場で、私が朝行ったら、プロレスする相手が毎日違う。日替わりの相手が待っているんですよ。プロレス流行ってたから。朝行ったら廊下でプロレスを無理矢理やらされる。

そして朝の会が始まって、先生来た。1日が終わって終わりの会の時に、「今日も伊勢くん、朝からプロレスで廊下で暴れてました」って言われて、終わりの会、私一人怒られるんですよ。なんだと、この理不尽は。もう俺は学校なんて信じないぞってずっと思ってきましたから。

1. 市長

最初の文で出てきた、先生の中で一部を活用することで全体をまとめようとするみたいなのってやっぱあるんですかね。それ感じるんですよ。一部の誰かになんかをおもねてしまって、先生の方が。その先生が圧倒的にパワーがあった時代はそうでもなかったと思うんですけど。だからそういうのはありませんか。

1. 教育長

あると思いますね。指導すべきことを指導できないで。北中はそれは身内から出てきたんです。教師から。

子どもによって教師の対応が違うという。「おい、なんていう服着てんねん」って注意する生徒と、ちょっとやんちゃぐらいの奴には「おう、よう来たな」って同じ教師がそう指導しているのはおかしいって言って、教師から教育委員会にクレームが去年上がりましたよね。

1. 市長

それは、その先生からしたら、そのこっちの子は来てくれるだけでも自分は多様性を評価したんだっていう風に言うかもしれませんよ。

1. 教育長

いや、そしたらね、こっちに怒鳴るべきじゃないでしょうね。

だから漢字検定もね。私言いましたから。特別支援学級で同じ授業で同じ教材で受けられない子が二桁いましたよ。その中で漢字検定をするのは、意味があるのか。一時間も取ったり、三十分も取ったりして。この子たち、それで写さすのがこの子たちの学びなのかっていうのは。

1. 市長

だからね、あのルールも含めて条規だと思うんですよ。その漢字検定で出来る出来ないもそうだし。ただその本当にその条規を当てはめていくことに、子どもの視点に例えば立って見たらばどうなんだっていうことを問い直す部分でもある。

1. 教育長

一番嫌やったのはね、そのやんちゃな奴らが伊勢に対して「あいつ生意気やし、なんや暴力もふるいおるし、言うこと聞かないし」で攻撃したのわかる。

でも普段普通に喋ってた周りの友達がそいつらを恐れてか、その子らまで

私を無視する。喋らない、プリント置かない。こいつらなんだって一体。俺が独りぼっちなん知ってるやろお前らって。

1. 市長

いや、だからその同質性を求める運用の中で育つと、自分の安全を守るためにそうならざるを得ない。

その人も気の毒ながら弱い存在であって。

1. 末浪委員

それが多分時代を過ぎていって、今はそれに異議を唱える子も同じ状況だったら異議を唱える。でも俺知らないしとか、そんなんしないしっていう子も多数今は増えてきてると思うんです。

そんな中でこういう話が起きてきてるんじゃないかなって。

1. 教育長

だから合田次長さんのところにね、ヘイトクライムを起こさない教育の中で他人ごとにしな。差別的な言動を自分事と捉えるという力が大事やと。

俺に関係ないねんっていうんじゃないかって、それが多様性やみたいところら辺は共生やっていうのがまさしく。

1. 市長

それはね、まさにその非国民だって周りの人を糾弾を一緒にしてた人たちが、戦後手のひらをパッと返したっていうのと全然変わってないわけです。

でもその時に「お前そんなんで」って言った人はそうじゃないと、自分が危ないと思ってたわけですよ。そういう空気だったわけね。だからその人もある種、被害者なんだけれども、でも自分がやってる行動がどういうことなのかっていうことを、だから考えることはできなかったんですね。

1. 教育長

私の小中はこんなんだっかり。絶対教師になんかならないと思っていたのに。信用できない学校の教師だなんてと思っていたのに。

1. 西畑委員

僕も五年生の時にクラスでいじめられた子がいて、その子をかばったんですよ。「そんなんしたんなって」って言ったら一緒にいじめられました。

1. 市長

だから、そういうふうに育てた位置からとも、繋がってくるんだと思うんですけども。私は今日だからどんなクラスが良いクラスだっていうことは、結局は個別指導をやるわけじゃないんで、集団生活を営まして集団指導するっていうことはそうなんですよ。

ただ、その集団の中でどういったことにポイントを置いていくかっていうことをちょっとみんなに今のお話、その弊害の部分だったりも含めて問い直していく。だから今日、非常にその「人のことを喜べる」とか、その「他人事にしない」とか、何でしょうね。我が身を守るために他の人を攻撃しないといけないみたいなことであってはいかんとか、「そこをちゃんと整理ができる力」っていうのが、恐らく教員の方に求められるっていう話なんじゃないのかなと思って。

1. 西畑委員

吉田先生の話すごくよかったですと思いますよ。強豪チームの自己ベスト。それぞれが自分のベストが見えていく。だから上がっていったらみんな喜んでいうそういう環境ですよ。認め合うということでしょうし。

それが一つの例えば、陸上部やって陸上部っていう中やけど、それもいろんな種目があって、自分のこれがと思ってるものを今挑戦して、ベスト自己ベストを伸ばしていくっていうのっていうのを、別にその学習の強化に置き換えたっていいわけじゃないですか。

今まで六十点しか取られへんから、今日は七十点取れたよとか言ったら、すごいやったやっていうんでもいいですし。

1. 教育長

多様な価値観を持てるというか、

1. 末浪委員

それでいうといいですか。前回のその校長先生たちのお話の中で思ったことがあって、そのアート思考っていうのに置き換えて、例えて考えていった時に、例えばその白いキャンパスに置かれて絵を描いてと言ってそこに絵を描いていく。

それが失敗しても修正する力とか、出来上がったものを認め合う力っていうので、アート思考で例えられたと思うんですけど、私はさらに踏み込んで、じゃ、白いキャンパスをみんな置かれた時に書いてと言われて、多くの人は大人もそうだと思うんですけど、「みんな何描く」とか、「どんなんすん

の)、「あんなん描いてる。ほんならこっち行こう。」みたいな感じで周りを見て行動してるってところがあると思うんですね。

なので、主体性っていうのを深めていくっていうのは、与えられた時に、もうじゃあこれ描こうっていうふうに、もう一歩そこで踏み出せる力っていうのがいると。

1. 市長

おっしゃる通り、だから最初にその主体性重視だみたいなことで、全然力も何もついてないのに、白いキャンバスだけで、それで「はい自由です」みたいなのでは結局無理だっていうことだと思う。

だからその前提に、いや、こんなピカソみたいなのもあってもいいし、こういうようなゴッホみたいなものあってもいいし、印象派もあってもいいしみたいなことを、そのちゃんとその筋としてインプットしてあげながら、だからそういう主体性を引き出すためのインプットという意識でやってるのかどうかっていうことなんじゃないですかね。

だから許されるならば、場合によってはキャンバス以外のところに描いたっていいんだみたいな。それが他の人に迷惑をかけるのはダメよっていう。あるいは他を悪く言う。あるいは他を見下げる。他に対する憎悪を煽るみたいなことはダメだっていう。やっぱりその基本的な倫理みたいな共生のために必要な作法はこういうことだっていう部分をしっかりやりながら、主体性を徐々につけていくためにどうしたらいいんだっていうような形で組み立てていけるかっていう。それを本当にその学年ごとにじゃなくて、本来は学年横断的にみんなが議論をしながらやっていかないといけないと。

それが前栽小学校は、ちょっと違うかもしれないですけど、福住小学校は、今小規模校になってるんで、本来やりやすいはずなんですよ。その学年を横断しながら、徐々に主体性をつけていくってのはどういうことですかっていうような話だったりとか。

だからその何でも好き勝手やらせたらいい。多様性でなんとかで集団をそんな決めつけていうのはよくなくてっていう話をすると、現場から必ず出てくるであろう。じゃあ好き勝手させたらいいんですねっていうふうに逆ギレでしまう人がきっと出てくる。

そこに対して、その主体性の素地を育てるための「自分でチャレンジができる自分の目標をつけていくためにいろんなものがあるよ」ということを、どの段階においてしっかり学んでもらいながらやっていくかっていうような議論が各校からないといけないし。だからそれをね、その就学前に巻き込んでっていうのはそういうことですよ。

だから、その幼稚園の時に、バルーンアートで綺麗に膨らみまじたみたい
なことを、めちゃくちゃ大事に育てられた子がいきなり小学校でその状態に
なってもしんどい。

ルールを当てはめすぎて、前栽小学校の一年生がギスギスしてるんじゃない
かっていう話にも、結局そのマウントを取る行動になってて、まさにその
今日も伊勢君が暴れてましたっていう風に言った子は、その正義の錦の御旗
のもとに人を攻撃する快感を得てしまってる。

私もよくやられました。しょっちゅうですよ。今日も並川君こんなとんで
もない事をしてました。ここ、要は正義の味方のふりをしている自分が喜ん
でるだけだなと思いましたけど。

いや、だからそういう方向に持っていかないっていうことを、つけさせた
い力とともに、やっぱりこういう部分になってはいけないっていうところを
合わせて、両方やっぱり今回は盛り込むべきだと。そのきれいごとの部分だ
けでは多分ちょっと見えない。

今こういう形でやった時にどんな歪んだ人が出てきちゃうんですかってい
うことも含めて、こういう風に歪ませてはいけないっていう部分も多分合わ
せてやっていく。あんまりさ、それネガの部分書かないでしょ。いや、書き
ましようよ。こういうこういう形になってしまったらいけないんだっていう
部分をイメージできてない。

1. 教育長

私はね、あの森永先生の話とかを聞いて、一つ思ったのは、教員は何に寄
り添うのかって。子どもらの生きづらさや苦手なことや、そこで悩んでいる
というか、右往左往しているというか。

その姿にこそ寄り添う、その姿にこそ学ぶんだって。そういう教員であら
ないと、本当に集団作りはできないのだろうな。子ども見てますから、先生
がどこに何を大事にしてるかなんて、呼吸するように、特に小学校なんて。
それが教師学ぶことなんじゃないかなって思いましたね。

この子はなんでこんな苦しんでるんだ。この子はなんでこういう風な集団
に入りにくいんだろう。この子はなんでこれが苦手なんだろう。どうやっ
たら良いんだろう。そしたら自分はどういうふうな手立てをしたら、この子
は少しでも漢字に一個でも二個でも取り組むという、自分を変えていく事。

漢字検定B4用紙1枚なんですよ。それ何十級もあるんです。自分のとこ
が作ったやつが。そんなん苦手な子は出来ないって。それなら、この子が五
分でもええから、漢字をするためには何を変えたらええねやろ。自分の何の
考え方や立ち位置や、やり方を変えたらええねやろっていうことを自分に返

して、この子の生きづらさ、やりづらさを自分に返すことが学ぶことで、そこからどんな学級にしていこうと見て考えていくのは、視点はそこじゃないのかなって、私なりにあの話をそういうふうに解釈したんですけどね。

1. 西畑委員

ベストプラクティスっていうのはやっぱあるわけですよ。何十年も積み重なった経験か、現場のやり方で。ベストプラクティスでもあって。ベストプラクティスを当てはめればいいんだっていうふうにばかり思ってる人がいる。

1. 市長

成功体験ですよ。過去のね。

1. 西畑委員

そうですね。それをやるばかりに、今のようなお話とここで起こっていることっていうのをそこに取り込んで、やり方を考え直すっていうことが抜けてるっていうものも、ものすごいよくあるんじゃないかなと思うんですよ。

ここでやるべきことは、それじゃないだろうっていうのも、いや、今までやっていたからって平気でそのまま押し付けちゃうっていうね。

1. 市長

周りの先生にベテランがそれをまた言っちゃうってのもあれですかね。

1. 西畑委員

あると思います。

1. 市長

うちはこれを大事にしてきたっていうことで。

1. 西畑委員

中学校区とかやったら、よくあるような話のようにも思いますね。特に生徒指導をやったような先生の話の話を聞いてると、今までこうやっていたんだからっていうのを、制服の話をした時にそれはすごく感じましたね。

1. 市長

ゆえにそれはやっぱり何のためについていう部分だったり、何に寄り添うためにやるんですかであったり。それをむしろ今はアドバンテージがあるグループの方の子どもたちに対しても、ちゃんと共有できるような通訳を果たさないといけないんじゃないかなと思ってまして。

子どもの理解研修会の際に、例えばそのADHDの子が動いちゃうのは、その子なりに落ち着くため動かないといけないという部分なんだという話で。例えばその先生だけはわかったとしましょう。先生だけは。けど周りの子どもはまだ全然そのことを理解できてないと。

なぜ、こいつは勝手に動き回ってんねんみたいなトーンだとダメで、何が起きているのかとか、この子は今頑張ってるどころなんだよということをちゃんと他の子にも、その他の子の頑張りの部分を伝えてあげる技術がいるんじゃないのかなと思ってる。

1. 教育長

そう、その子が呻吟してる姿を人として、心が震えへんのかという話で、そこに寄り添っていけることが自分の喜びやと。生きてる喜びってそういうことなんやろ。

1. 市長

その分かりやすいチャレンジ。やっぱりみんなから見てすごいなっていう部分と、お前こんなやってんみたいな部分っていうところがあったとするならば、いや、彼がチャレンジしていることには、本当にこの子はどういうところを今乗り越えようとしてんだとか、どう頑張っているんだということをきちんと他の子にもわかるようにするみたいな。その辺の組み立てっていうところに、みんなで万歳っていうよりも、先生のかける労力をシフトしていってもらい必要があるんじゃないのかな。

1. 教育長

今日ね、教育総合センター所長からちょっと教えてほしいって来られて、ある学校の私の主張に出す作文がどうも気になるんだと。珍しく障害者のことについて書いてある。で、今まで気づかんかったけど、その子は自分はこのだけやっぱり全然無意識に書いてあって、題材として素晴らしいんだけど。その時にいくつか気になる表現がある。例えば、私は今まで障害者に同情できなかったんですって。

それを聞いたいろんな立場の人は、俺ら同情される立場って誤解も受けるし、事務局としてはどうしてもその表現は変更したい。

でも、学校は校長を含め、子どもが書いたやつだから、それは変えたくないと言うと。それが子どもの大事にしてるみたいなのという思いも今までは通ってきたし、教育委員会がそれを検閲するみたいにして、変えてくれって言うたら問題があるん違うかと思うけども。

1. 市長

面白い題材です。

1. 教育長

どうですかという話をしてきた時に、私はそれは検閲でも削除でもなくて推敲なんだ。その子が書いた綴り方をもう一遍その子と対話をしながら、その気持ちはどんな気持ちあったのかを、もっとたくさんの人にわかってもらえるように伝えるには、どんな言葉がふさわしいかということをやってきて、その子の中から同情という言葉が共感できなかったという言葉。

こんな単語があるよねって。あなたの気持ちは同情じゃなくて共感できなかったんじゃないのかという対話をする中で、その子は自分の気持ちをぴったり表す言葉を見つけていくって。それがその子の認識に変わる。そしたら、あなたの主張はみんなにもっと理解してもらえるよねって。そんなことで対話をしながら、その子が発する言葉やその子の気持ちをちゃんとした言葉にして、その子ができるレベルでね。さらに深めていくことが推敲なんであって、それがその子のみんなにわかってもらいたいという願いを本当に届けることになるんだって。

1. 市長

だから、こっちやと先生思っただけじゃない。こういうことをやってはいかんみたいな感覚で、例えば捉えてるんだったら不適切だ。それを聞いて傷つく人がいることわかんないのか君は、みたいな感じで訂正させるということであつたら、やっぱりそのどうなのかなっていうところに対して、ちゃんとその子の視点まで下りていった上で、どういうことを表現したかったのかってことを対話として聞きながら、それが私が書きたかった言葉なんだみたいなところをちゃんとディスカッションする上で、「実はね、この言葉だったら、聞いた人にはこういう形であなただけが意図していなかった、あなたが本当に大事にしたかったフレーズの意味ではなくて、違うフレーズとして傷つけちゃうことがあるんです。」っていうようなところもちゃんと学習としてやらないと。

1. 教育長

そういう話を今、所長と始まる前にして、それがその子の現実認識を、言語による現実認識を高めるといことなんだと僕は思うよ。

1. 市長

だからそこなんです。だからその多様性だったり、主体性を尊重しようという方になった時に、その狙いだったり、その指導ということ自体を放棄してしまうということまで言う人があるので、そこは。

だからそれやったら、別に教員いらないうすよね。だから、どういう力を大事にしてあげたいのか、ちゃんとその自分の思った部分を伝えるように、言葉として表現する力っていうところがあるんだとしたら、それはちゃんと指導すべきなんですよ。

それは、だから結局何を力として養えないのかみたいなことがちゃんと共有できてない状態で。

1. 教育長

その時にやっぱり誰も傷つけないという、その子の哲学ではないとして、人としての生き方をね、ちゃんと具体的に教えることになると思うんです。誰も傷つけないよね。

1. 市長

そのアドバイスを受けてどうするの。

1. 教育長

所長すごく納得したみたいで、「もう一度校長と話してきます」って言ってくれて、すごいイメージできたよ。

それは一緒に推敲して、その子が本当に伝えたかったことをたくさんの人に伝えることだし、その子のことも理解してもらえよ。

1. 西畑委員

小中学生になってまだものも全然知らない訳ですから。だから、そういう意味での知識をちゃんと与えて。

1. 市長

それが多分さっきの白紙のキャンパス。だから主体性とか独自性とか何か多様性を認めるって言ったら、じゃあ白紙のキャンパスまで戻るんですか。

という人たちが。そこと通じる話だと思います。まだ発展途上なんだと。

1. 西畑委員

そのところまでもう一度戻って、あれを引き出すっていう。

1. 末浪委員

結局のところ、先生はその子その子のストーリーみたいなのを、全部把握しておいてほしいところがあるっていうことですよ。

何が言いたかったかとかもそうですけども、何がしたいかもそうだけど、その子にとってこれは意味があること、この子にとったら、その子がやっているのは意味がないことに見えるかもしれないけど、この子にとってこんな意味があるからっていうのを説明できるようにっていうことは、みんなのストーリーを把握。

1. 市長

先生が全部完璧に最初から理解しきってやるっていうのは 難しいと思うんですけど、まずそういうスタンスで臨みながら、クラス全体にそういう共通した認識、それが共生していく、共に生きるっていう部分で大事なことになるんだよというところをやっていくと。

1. 教育長

そのときにね、あの作業療法士の考え方であったり、臨床心理の考えが大事なものは、十九世紀とかはね、子どもの精神医学っていうのは発達しなかったカテゴリー化しなかったんですよ。大人しか発達しなかった。子どもは発達していくもんだから、知的な行動問題点があっても、感情情緒にトラブルがあっても、子どもは教育していったら良くなるもんだからっていう理由で、十八世紀、十九世紀のヨーロッパとかでは子どもの精神医学はカテゴリー化されなくて、大人の精神医学だけなんですけど、それがやっとなら近代になって違えば、子どもには特性があって、その特性をしっかり把握していかないと、トレーニングしたって逆効果になるんだ。教えたってそれは逆効果になるんだって考え方が最近出てきて、だからこそ、子どもたちに指導するときに、こういう風に伸ばしていこうとするときに、その子の特性理解や臨床心理の視点がすごく大事なものは、やたらめったらみんな頑張らなきゃねん。努力したら出来るねんというのではないという。そこを混同しないというのがすごく大事なっていうのを、私も森永先生の話を通して直接オンラインで聞いたので、もう一度、その臨床心理の本を読んで、ヨーロッパのどういう起りで

来たのかっていうのに、そうなのかつながった部分があったんですけどもね。

1. 西田委員

その特性理解というのが教師に必要ということですけどね。さっき言っておられたADHDの子が自分を落ち着かせるために動いているという、それは特性としての教師は理解しているわけですね。ところが、他の子が同じようなことをした場合には、この子には厳しく怒ると。

そういったことを教師側からすれば、それは平等な扱いなんだけど、手のかかる子にはしっかり手をかける。手のかからない子にはちょっと軽く手をかけるだけで、それが学校における平等ですよ。ところが生徒からすればそれをわからないことが多いですね。

あの子だけ怒られない。俺はちょっとこんなことしたら怒られるのにと。だから子どもたちはその辺は分かっていないところをどうするかという、この部分になってくるともう教師の職人技の世界ですよ。

1. 市長

子どもから見た不公平感を生まないっていう。

1. 吉田委員

その職人技もあるし、子どもら自体もそれを不公平だと感じないような見方を身につけないといけない。それはなかなか難しい。

1. 市長

そこが例えば、今のADHDの話だったら、石井先生が言ってた他の子が理解できるような形で動ける機会を作りましょうとか、そういう話だったと思うんです。

好き放題させるってことではなくてっていう。そこにはテクニックがやっぱり出てくると。

1. 教育長

それこそね、幼いうちからどんな価値観で教育してきたかやと思うんです。やっぱり様々な価値観であったり、様々な見方であったり、それがやっぱり幼い時から育んでいかなかったら、理屈で教えられるものと、そうじゃない部分があるのかなと。

1. 市長

それは誰にとって。

1. 教育長

子どもにとってです。どんな風な感性を持つのかとか、どんな風な人の接し方を心地よいと感じるのか、どんな風に人を見る見方を育てていくのかっていうのは、本当に幼児教育だと思うんです。

1. 市長

そもそも人に違いがあるということがみんな分かっているのが、多少の前提だと思うんですけど、今おっしゃっていただいたのは、だから本当にその力量を問われるのは、その個々の状態に応じた取り組みみたいな中で、不公平感を生まないためにどうしたらいいのかって、そういうご指摘だったと思うんです。

1. 吉田委員

それは教師の技もあるし、子どもらとそのみんなの違いを理解する。理解するという、両方噛み合って。

1. 市長

そこは、だからそれぞれが経験則で身につけていきたいと思います。熟練の職人になるまでっていうのはやっぱり難しいので。だから、そこにこそ専門家の視点を入れながら、テクニック部分である程度補える要素もあるし。

それで、そういったその力量を育てる方に先生方の労力をかけていくことの方が、参観日の時にクラス全体としてかっこよく見えてまとまっている姿を見せて、完成度の高いものを発表できたみたいなことよりも大事ではなからうか。

1. 教育長

ここは、胡散臭い言い方なんですけどね。そうやって不公平感を持って怒られた子もおるかもしれないけど、最終的に子どもが納得するかどうかは、先生俺のこと大好きやねんって子どもが思ってるどうか。

1. 市長

不公平感の多分背景には、あいつはあの先生に好かれてるけど、自分のことは嫌いなんだみたいな方向に行く人もいるかもしれないですね。子どもの

側が。

だから不公平ですってというのは、もうちょっと大人の感覚であって、なぜ私だけ嫌われてんねんみたいな感覚に子どもが陥らないためには、ちゃんと好きですよっていうことを届けるってことですね。

1. 教育長

先生、俺のこと大好きやねんって。

それは日々ね、子どもらが息を吸うように感じてると思いますね。毎日の授業したり、給食を一緒に食べたり。だから小学校って、特に一緒にご飯を食べたり、一緒に掃除をしたり、一緒に違う活動をしたりするのは、だって一緒に生活する中で先生、俺のこと大事やと思ってるわとか。俺のこと好きやねんわって思ってくれてるわってというのがね、ベースになかったら、どんなにスキルを使おうが、そこは空回りする部分があんのかなってというのは思うので。

1. 市長

先生が自分のことを好きだというふうに、みんながちゃんと思えてるクラス、そういう要素があると思うっていう事ですね。

1. 西畑委員

好きだと思われるというっていうことは、その子のことを見てるってことですよね。ちゃんと見てくれてるってことですよ。

1. 教育長

やっぱりその視線とか目とかね。うちの特性を持った孫がこの頃、ママに、「ママ嫌い、ママ嫌」って言うんですよ。

もう娘も、仕事が始まったから、「ママもう知らん。もう放っておくで。」とかって言うんですよ。違うって。「でもママは大好きやで」って言えって。

1. 市長

そこに寄り添い方、そうやってやるためには、やっぱり先生側に余裕がいる話なんです。

ところが、それを今までは人数が少ないからって加配の話にすぐ結びついてしまうわけだけれども、どこを大事にするかっていう部分からしたら、本当にやってビシビシっとやる部分よりも、こっちにシフトするんだ、その中でゆとりを先生方が生んでいく。

1. 教育長

いやほんまにね、肩の荷が下りる部分があると思うんですけどね。その方が。

1. 市長

だから先生の肩の荷を一旦どうやって下ろさせるかということだと。

1. 西畑委員

例えば、クラスの中で特性のある子が居てっていうのも、クラス全体がうまいことその子のことを理解してれば、先生も楽になると思うんです。

そのこの伝え方ってどうなんやろ。その辺は難しい話なのかもしれないけど。

1. 末浪委員

本当はそこを気をつけないと、吉田委員がおっしゃったように、理不尽を生むっていうのもあるし、下手したらそうやって言ったら、自分も「うろろうしていいんや」みたいな形で動いていいんやっていうふうに、低学年の子ほど、「俺ADHDだし」とか言って、逆にそうやって逆手に取って動いてしまうこともあると思うので、そこが技っていうかね、そういうのもある。

1. 市長

みんなが理解できる理由をどうちゃんと組み立ててあげるかっていうこと。その理由を共有するっていうこと。ちょっとその指導においてのそのポイントみたいな部分と、ちょっと今日両方混ざってしまっ。

今日は大分いいワードをいただきました。振らせていただいていたいいクラスって何ですかっていう部分から、そのこの会話をしているうちに、前回出てこなかった「子どもにつけたい力」っていう部分が結構出てきたし、それを導くために先生方がつけていただきたい、その力量っていうのはこういう部分ですっていう部分だとか、あの前はどういう力をつけたいって個人の方だったけども、今日はこうなったらあかんっていうところが結構出てきた。

それはでも素直にやっぱり同じ、そうならないようにっていうことも等しく重要なキーワードであるから、だからもうまとめすぎず、まず、ちょっと今までの部分を書き出していったものを見て、それをちゃんとちょっと整理をしていきましょう。

はい、ということで、今日はどうでした。

1. 教育長

ちょっと予想してたんですよ。市長にしてみたから、世の中にちょっと思い切ったものをちょっと期待してたんですけど。

全く同じように、長野に疎開空襲をしてた子が、お母さんに会いたいという作文を書いた時に職員室に呼ばれて、女の先生に、何をたるんだ事を言っただけで言われて、一人一殺、一人につき一人殺すという意味で竹やり訓練をしてるんだぞ。お国のためになって言われたと。それが、敗戦の日を境に、先生が民主主義だと分かった時から私の人間不信が始まりましたっていう。

1. 市長

いやいやいや、ある話でしょ。

1. 教育長

朝日新聞の天声人語に載ってましたね。

1. 市長

だけどもね、根本的にこうなっちゃいけないっていうものをしっかり受け継いでるんです。

やっぱこれをね、美しく思う心理はある。そこを超えよう。

だから、その一番、非常に難しいわけですよ。違う価値観の者をどう共存させる中で集団を作っていくかっていうのは、これは非常に難しい部分なんだけども、いや、それが共生の作法ってやつだ。

だから最低、やっぱこれはやっちゃいかんという部分と、何をやっぱり大事にしましょうという部分について、こういう会話を学校現場でやることあるんですかね。

1. 教育長

やることはほとんどないでしょうね。

1. 末浪委員

日々の生活の中でこういう視点を持ってないと思います。

1. 教育長

校長会でこれを10月、11月でやってもらおうということ、まなび推進課

で。

1. 市長

それを本当にちゃんとやらないで、特別な機会を作って、その特別な機会の時に、ビシッと揃ってるみたいな感じで見せるのが成果なんだっていう思考から外れないと、今日話題に出たような、余裕が生まれないと。

はい。今日はありがとうございました。

終了時間 午後4時43分